インドネシアにおけるナショナリズムの発展

情報科学部・K19093・福本光重

本レポートでは、「人間性の探求」の講義で取り扱った、インドネシア（オランダ領東インド）が、どのような歴史的背景があってナショナリズムが誕生し、国家が形成したのかについて触れていく。広大な領域、膨大な人口、地理的分散、宗教的多様性、民族的多様性、言語的多様性という幅広い特徴を持ったインドネシアが、実際にどのような経緯から、ナショナリズムが誕生したのか考察していく。

インドネシア共和国としての独立までの間、オランダ東インド会社、オランダ政府、イギリス政府、日本軍による植民地支配を受けているが、支配の起源となったのは、１６世紀の大航海時代に西欧諸国が香辛料貿易のために、オランダ東インド会社が東インドと接触を図ったのが始まりである。当初は、港市を拠点とする海上貿易独占が目的であり、領土の獲得や、法の施工は必要最低限行うスタンスだったが、１８世紀に入り、香辛料貿易の不振、私貿易の増大、会社内部の腐敗により、赤字経営に陥る。そこから次第に、ジャワ島内陸部やマドゥラ等を中心に領土獲得し、獲得した領土で当時の有力商品であるコーヒーやサトウキビ、藍などを栽培し、これらを輸出することで利益を補填する方針へと転換した。加えて、オランダ東インド会社はジャワ島内部の王朝間での王位継承戦争などにい介入し、１７世紀後半には、マタラム王国をジョグジャカルタとスラカルタの2国に分け、実質的な支配権をオランダ東インド会社に譲渡することになった。元来オランダ東インド会社は、東インドを中心として、アジア各地の中継貿易によって、莫大な利益をあげてきたものの、領土獲得による戦費と領土に対する行政費の圧迫や、イギリスの勢力拡大による独占が崩れたこと、私貿易による会社内部の腐敗が重なり、東インド会社は解散することとなった。その後はオランダ本国の政治情勢の変化もあり、バタヴィア共和国成立、イギリスによる支配を経て、１８１４年のロンドン条約によって、イギリスから希望法やセイロン島などを除く旧植民地がオランダに返還された。

１８２０年代からのオランダ本国の深刻な財政危機とジャワ島での反乱（ジャワ戦争）の窮地を救う手段として、１８３０年強制栽培制度が施行された。農民の犠牲によって行われたこの制作は、彼らを極貧のどん底に追いやった。オランダよりヨーロッパ向け作物のコーヒー、サトウキビ、藍、タバコなどを耕地の５分の１に栽培することを強制され、あげた莫大な利潤はオランダ本国によって低価格で買い上げられ、本国に送られた結果、福祉を忘れられた農民の苦痛は大きかった。しかし、強制栽培制度による現地農民の苦役と飢餓の実態は、ダウエス・デッケルによる小説「マックス・ハーフェラ−ル」によって告発された。この小説はオランダ本国を含むヨーロッパ各地で大反響を呼び、強制栽培制度を非難する世論が高まり、１８７０年ころまでに順次廃止されていった。また、植民地に対して、名誉の負債を返還すべきだという主張と、現地人の福利の向上を図るべきという主張が広まり、２０世紀頃から、オランダによる倫理政策へと転換してく。倫理政策の時代には、先の観点と原住民官吏の養成から、一般の原住民に対する初等学校、中等学校の設立が行われた。また、医師学校や官吏養成学校の設立なども行われた。こうした学校教育の普及によって、民族としてのアイデンティティやナショナリズムの創造を助長し、後のインドネシア民族主義運動や独立運動につながっていく。

太平洋戦争の最中、日本軍は、石油をはじめ軍事資源を求め、蘭印と称する東インドの侵略にあたった。空挺隊をスマトラのパレンバンなど要地に降下させ、ついでにジャワ島へ上陸作戦を進め、１０日を経たず１９４２年３月に全東インド軍を降伏させ、オランダによる支配が崩壊した。このような短期間における作戦の成功は、現地人のオランダ軍に対する非協力が大きな要因であった。現地人は、日本軍の統治による、待望の独立達成の可能性を期待したが、日本軍の占領の現実は、期待を裏切るものだった。東條首相は、独立の許容をビルマ・フィリピンに対して行ったが、インドネシアに対しては、何もなかった。しかし、戦局が日本不利となり、現地人の対日感情も悪化の兆候が見え、１９４４年小磯首相の独立容認の声明が行われた。

１９４５年に日本が連合軍に降伏し、民族の指導者スカルノがインドネシア独立宣言した。オランダはその独立を認めず、独立戦争へと突入した。戦争は４年の歳月を経て結果的に、１９４８年ハーグ円卓会議によりインドネシア共和国の成立が承認された。

上記した歴史からインドネシアという国は植民地支配という長い歴史から形成され、支配された当時の環境が蒸留されてできた国家である。つまり、インドネシアは植民地ナショナリズムが大きな要因になっていると考える。オランダの植民地支配を受けている東インドの同胞たちが、互いに協力しあって独立を目指すという精神が国民統合の礎となり、共通の敵を打倒し国民国家の形成と独立という意思が、インドネシアのナショナリズムの根本だと考えた。また、植民地支配の時代に敷かれた教育や環境の向上も少なからず、ナショナリズムを生む原動力となっている。これらも含めて植民地ナショナリズムだと考える。

以上本レポートでは、実際にどのような経緯から、ナショナリズムが誕生したのか考察した。インドネシアのナショナリズムは、共通の敵を討つべくして生まれ、支配された中での環境で生まれた植民地ナショナリズムだという結論に至った。しかし、植民地支配する側の視点から見た支配の形態を深堀りし、支配側の思惑も絡めて考察を行うべきだと考えた。この点については今後の課題としたい。

参考文献

山本達郎（1965）『世界史体系　第６巻　インド・東南アジア』誠文堂新光社

岩崎育夫（2014）『アジアの国家史』岩波書店

NPO法人アジア情報フォーラム<http://asiainfo.or.jp/column/2016030601/2/>賛助会員　小川忠著　（2020/7/26アクセス）

人間性の探求　第５、６、７，９，１０回　パワポ資料